

発行にあたって

本書は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究B「ボランティアコーディネーションにおけるチャレンジドケース臨床研究」（課題番号16330110、2004－2006年度）を基礎にしている。研究成果は既に同報告書（2007年6月、A4版275頁）としてまとめているが、今回その一部を集約し、立命館大学人間科学研究所のヒューマンサービスリサーチのシリーズの一冊として発行することにした。

ボランティアコーディネート場面で発生する困難事例を、新たな社会システム形成への「Challenged チャレンジド」と意味化したこの研究は、当初、立命館大学人間科学研究所の学術フロンティア推進事業のサブプロジェクト「ライフデザインプロジェクト」（2000年度－2004年度）で取り組んできた研究課題である。ライフデザインプロジェクトでは、京都市社会福祉協議会・キリン福祉財団の関係者と共に共同研究プロジェクト（ボランティア・スキル・マッチング・エージェンシー・プロジェクトVSMA）を組織しながら、ボランティアの知恵が生きる社会システムとその動力としてのボランティアセンターやボランティアコーディネーターについて研究を深めてきた。このプロジェクトは、教育的には大学ボランティアセンターの設置に繋がり、研究面では科学研究費補助金でのチャレンジドケース臨床研究に深化した。

地域において発生する生活問題状況やそれに対応した実践活動として現実には展開されている人々の意志的な相互支援活動（＝ボランティア活動）について、活動当事者たちと共にその具体的事例を囲み、分析検討を加えつつ、共同財産として蓄積していくという臨床的研究方法論をもって取り組んできた。そして「ボランティアの価値や知識、技術が絶え間なく更新し循環する新しい社会システムとそれを推進していくエンジン」について提案していくというこの共同研究から、ボランティアチャレンジドケースの臨床研究というアイデアは生まれ、「ボランティアコーディネーションにおけるチャレンジドケース臨床研究」として、2004年度から2006年度までの3ヵ年の研究と

して継続することになったものである。

ボランティア活動に付きまとう曖昧さや揺らぎ、ジレンマを新たな秩序形成に向う社会の軋みと捉え直そうとしたところに私たちの研究の面白さと難しさがあった。その意味で私たちの研究自体も「チャレンジド」である。筆者を研究代表者として、研究分担者は、斎藤真緒(本学産業社会学部准教授)、桜井政成(本学政策科学部准教授)、西田心平(本学衣笠研究機構研究員)である。研究協力者は南多恵子(神戸夙川学院大学講師)、秦易子(滋賀県社会福祉協議会主事)、日紫喜あゆみ(本学大学院社会学研究科博士前期課程)である。講義にも使えるような「ケースブック」を編集してみたいという当初の狙いは未だ実現していないが、巻末のチャレンジドケースのデータベースも含め、本書は彼らとの共同研究の一端である。また膨大なデーター処理は本学卒業生的小林政夫君に全面的に依拠した。

私たちが目指している「行為しながら考える反省的实践家」(Donald A.Schon)にとって、チームこそ研究の原動力である。

2007年12月20日

立命館大学産業社会学部

教授 津止正敏

(人間科学研究所オープンリサーチセンター整備事業

コミュニティプロジェクト代表者)